令和３年（2021 年）2 月 16 日発行

長野県の埋蔵文化財情報誌

沢尻東原遺跡出土
蛇体把手付縄文土器

信州の遺跡

第16号

最新調査成果から１

古墳築造の謎に迫る　松本市　史跡弘法山古墳（こうぼうやま）

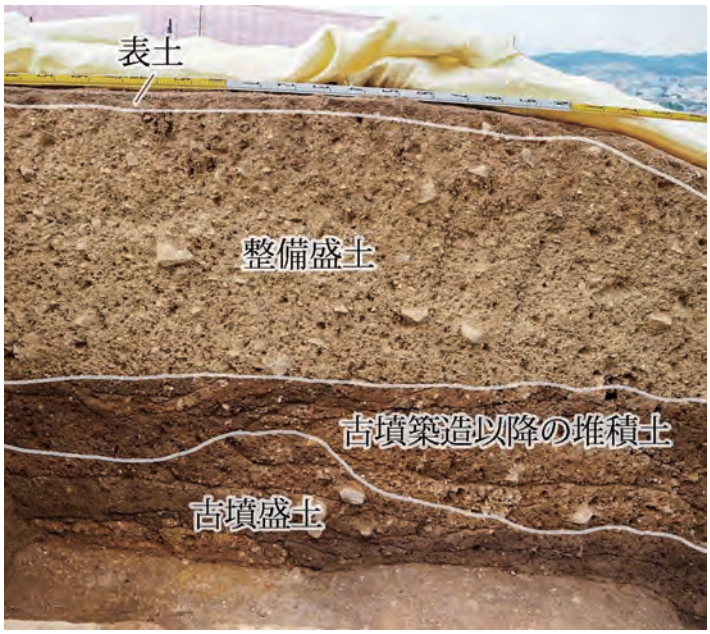
弘法山古墳は、松本市東部にある中山丘陵の北端に立地する全長約 66 mの古墳である。昭和 49 年（1974 年）の発掘調査で、東日本最古級の３世紀末に築造された前方後方墳であることがわかり、昭和 51 年には国史跡に指定、昭和 57 年には史跡公園として整備がされた。

近年、全国的に古墳の研究が進展したことから、弘法山古墳には再び注目が集まっている。また、前回の調査は埋葬施設を中心とした限定的な範囲にとどまったため、古墳の正確な形態・規模・外表施設などが未解明のままであった。このため、令和元年度より史跡弘法山古墳再整備事業（第２期整備）を進めることとなり、今年度からは、前回の調査で未解明であった内容を判明させるために発掘調査を実施している。

調査では後方部の２か所にトレンチを設定して掘削した結果、古墳の盛土、古墳築造後の堆積土、史跡公園として整備をした際の保護盛土などを確認した。古墳の盛土は固く締まっており、土を丁寧に突き固めて造られたことがわかった。また、盛土の中から弥生土器の破片や黒曜石が出土したことから、弥生時代の集落の跡から土を運び、古墳が築造された可能性が示唆される。また、古墳の裾部の調査から、築造時に地山を削って整形してから盛土していることもわかった。今回の調査により、弘法山古墳は非常に丁寧に造られていることがわかってきた。来年度以降も発掘調査により古墳の基本的なデータを集め、整備に向けて準備を進める予定である。

（松本市教育委員会　小山奈津実）

弘法山古墳遠景（東から）



後方部に入れたトレンチの土層（墳頂部）

現生人類の列島到来を物語る石器群発見

佐久市　香坂山遺跡

香坂山遺跡は、群馬県下仁田町との県境近くの八風山南西斜面で東西方向に延びる尾根に立地する。周囲から屹立した標高 1,140m の幅広い平坦な尾根で、現在はミズナラの原生林に深く覆われるが、旧石器時代には眺望の開けた見晴らしのよい草地であったとみられる。八風山は黒色安山岩という優れた石器石材の原産地で、これまで下茂内遺跡や八風山遺跡群など大規模な旧石器時代の遺跡が調査されてきた。香坂山遺跡はこれらの成果を受けて、上信越自動車道八風山第 2 トンネルの立坑地上施設の建設に伴い 1996 年に発見され、1997 年に長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査された。建物予定地では地表下 5.5m という驚くべき深さから約 3 万年前の姶良 Tn 火山灰層の下位で中型剝片を主体とする石器群が検出され、40m 離れたトレンチでは同じ地層から石刃を含む包含層が確認された。約 3 万 6 千年前という列島最古の石刃石器群であることが 2001 年に刊行された発掘調査報告書で示されていた。

高速道路施設地内での調査風景

2020 年 8・9 月に学術目的の発掘調査を実施したのは、この石刃出土地点の周辺である。ユーラシア各地で後期旧石器時代が、大型の石刃をもつ石器群から始まることを踏まえ、1997 年調査で出土した 2 点の大型石刃がそれに関係するのか検証するためである。1997 年調査区の高速道路施設地内と隣接する国有林内で約 134㎡を、姶良 Tn 火山灰層の下位まで発掘した。その結果、大型石刃、尖頭形剝片、小石刃からなる約 800 点の石器が出土した。この 3 種の石器の組合せは、中央アジア西部から北アジアに分布する後期旧石器時代の最初期の石器群と類似する上に、これら 3 種の石器を剝がした石核も出土し、製作技術もよく似ていることがわかった。つまり現生人類がユーラシアを西から東へ拡散する過程で残したと考えられている最初期の大型石刃石器群とよく似た石器群が、八風山の山中から姿を現したのである。香坂山遺跡は列島への現生人類の到来を語っているのか。その答えを求めて 2021 年も発掘調査を継続する予定である。

（奈良文化財研究所　国武貞克）

石器出土状況。壁に白く見えるのか AT 純層

2020 年調査出土石器。上段が尖頭形剝片 下段が左から石斧、大型石刃 3 点、小石刃核。左上の石器 5 ㎝。（写真 大木文彦）

最新調査成果から 3

縄文時代と平安時代の集落跡　朝日村氏神遺跡

氏神遺跡は鎖川に向かい北に流れる内山沢が形成した河岸段丘上に立地する。発掘調査の結果、縄文時代中期初頭（五領ヶ台式期）の竪穴建物跡 4 軒、中葉（新道・藤内式期）の竪穴建物跡 2 軒、平安時代（10 世紀後半から 11 世紀前半）の竪穴建物跡 1 軒および掘立柱建物跡 2 棟、縄文時代の陥し穴や貯蔵穴を含む土坑 99 基を検出した。縄文時代中期中葉の竪穴建物跡からは、遺構が埋没する過程で投棄されたかのような、完形または半完形の土器が多量に出土している。　（村井大海）

縄文時代中期中葉の竪穴建物跡遺物出土状況

縄文時代中期中葉の竪穴建物跡出土土器

最新調査成果から 4

町内初見の古墳時代竪穴建物跡　信濃町宮ノ腰遺跡

旧石器時代後半（約 2 万 4 千年前）のナイフ形石器や尖頭器を含む礫群（石器製作を含む生活跡）の一部を発見した。また、古墳時代中期後半の竪穴建物跡 1 軒と土器を捨てた穴跡 1 基ほかや、奈良時代末葉から平安時代初頭の竪穴建物跡 2 軒や火を使った施設跡 1 基、ゴミ捨て場跡？ 1 基など、古墳時代中期後半と奈良時代末葉から平安時代初頭にかけての集落跡も確認した。なお、信濃町での古墳時代の竪穴建物跡の発見は初めてである。

（西山克己）

左からナイフ形石器と尖頭器

古墳時代中期後半の竪穴建物跡の遺物出土状況

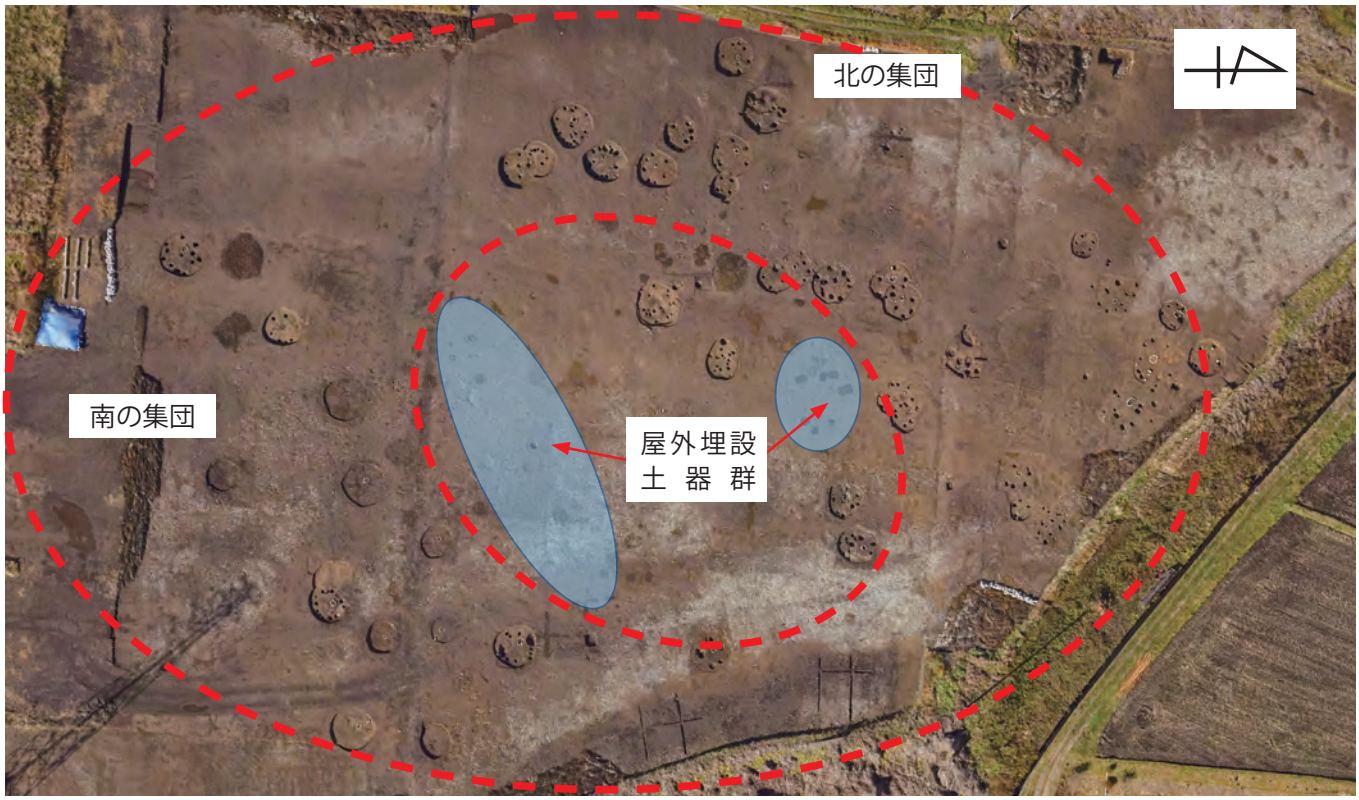
最新調査成果から 5

縄文時代中期の環状竪穴建物群

辰野町　沢尻東原（さわじりひがしばら）遺跡

沢尻東原遺跡は、天竜川右岸の河岸段丘上に立地する。1.8ha と広大な調査範囲で、縄文時代中期（約 5,300 ～ 4,900 年前）の集落の全容を把握することができた。遺構数は竪穴建物跡 50 軒、屋外埋設土器 43 基、土坑 54 基を数える。集落は 8 段階程度に変遷し、各段階に約 4 ～ 10 軒の竪穴建物が存在したと考えられる。竪穴建物は環状に並び、居住域は南北 2 群に大きく分かれる。居住域に囲まれた中央部では、屋外埋設土器群を検出した。集落の最終段階を除く各段階に数基ずつ埋設されたようである。口縁～底部まで残るものが多いが、なかでも、口縁部を上にして垂直に埋設する例が多い。今後の整理作業で集落の変遷や構造を明らかにしたい。

（廣田和穂）



環状に並ぶ竪穴建物跡群

石囲埋甕炉

屋外埋設土器

縄文人の行動や思考を探る
～土器の観察と接合作業～

壊れていたらゴミといった感覚で縄文時代のモノを扱うと、重要な事実を見落とすことになる。竪穴建物跡の凹地から出土する土器には、最後まで手が加えられており、無造作に捨てられた例は少ない。また、意図的に置かれた例もある。そんな目で沢尻東原遺跡の土器をみてみよう。

接合作業では、底を抜く、飾りを割って破断面を磨く、異常な高温で焼く等々といった鍋や容器としての使い方ではできない痕跡が確認できた。また、足りない破片の行方もさまざまであることがわかった。こうした点から、縄文人の行動や思考を解明したい。（寺内隆夫）

顔面把手付土器（10 号竪穴建物跡）
顔の表面だけが、取り除かれている

有孔鍔付土器の観察（10 号竪穴建物跡）
従来想定されてきた使い方（貯蔵具・酒造具・太鼓説など）ではできない、不自然な痕跡が多数認められる（①～⑤）。何らかの行為に伴って火にかけられた後、ここに持ち込まれた。大破片を床直上に敷いて何かを納め、小破片で蓋をしたと考えられる。

有孔鍔付土器出土状況（10 号竪穴建物跡）
周囲や上に乗る土器は、数十～百年新しいものを含んでおり、長期間、廃屋の凹地が利用されていたことがわかる。

４か所以上に破片が分散していた浅鉢形土器
最大 60 m余離れた竪穴建物跡の間で接合した。意図的か、偶然か。今後、いくつかの仮説を立て、検討を重ねたい。

埋文ほっと 情報

掘るしんinながの2020　塔鋺形合子は何を語る

令和２年12月12日（土）　ホテルメトロポリタン長野

塔鋺形合子（蓋）

長野県埋蔵文化財センターは、新型コロナウイルス感染対策を講じながら、ホテルメトロポリタンにおいて、「掘るしんinながの2020 塔鋺形合子は何を語る」を開催した。当日は、事前予約をいただいた来場者56名に加え、長野市柳原地区住民自治協議会の役員はじめ５名の来賓をお招きした。また、長野ケーブルテレビによる録画をおこない、来場できなかった方がテレビでご覧になれるよう便宜を図った。

長野市小島・柳原遺跡群（以下「柳原」という。）出土の塔鋺形合子に関する基調報告のあと、宮内庁正倉院事務所長の西川明彦先生と奈良国立博物館学芸部長の内藤栄先生にご講演いただき、長野県文化財保護審議会委員の市澤英利先生にご講評いただいた。

正倉院宝物にみられる古代技術と塔鋺形合子（西川先生）　「東大寺献物帳」という目録に裏打ちされた奈良時代の正倉院の宝物群は、1,300年間にわたって意図的に人が守り伝えてきたものであり、美術工芸的に完成していて後世のものの原点となっている。さらに、国際性が豊かであるといった資料的な価値や意義がある。

続いて、柳原の塔鋺形合子と形状が「似寄り」の正倉院宝物黄銅合子について、構造・技法の相違点を指摘。柳原の資料が一鋳であるのに対し、黄銅合子は、相輪の先端に見える宝珠から心棒を伸ばし、50枚以上の部材をテーパーピン状にした鋲で固定する特殊な技法が用いられていることなどが、X線透過撮影と模造品の製作過程で判明した。また、各部材には細かな点や線で文様が刻まれ、円板部分には初層から第５層にかけて、段階的に赤から白に至る暈繝の配色で顔料を充填するなど、精緻な技と美が凝縮されている点を指摘できる。

塔鋺形合子がたどった道（内藤先生）　塔鋺形合子の歴史・地理的背景としては、紀元前２世紀にインドやスリランカで制作された塔形容器が祖形で、これらは、周辺各地に伝わった。その後、中国や朝鮮半島を経て、法隆寺献納宝物の銅塔鋺形合子にみられるように白鳳期の７世紀後半から８世紀初頭には国内に伝わった。もともとインドやスリランカでは舎利容器として用いられていたが、玉虫厨子の須弥壇描画などからわかるように、日本では香合として柄香炉とともに香供養に使われた。

柳原出土の塔鋺形合子の円板や蓋の肩に刻まれた魚々子を地文とした唐草意匠は、摩滅が著しく技法に不明な点はあるが、唐草文様の形や唐草の地の一部で魚々子を省略している点が、日光男体山の塔鋺形合子１号または２号と酷似している。同じ工房で制作したものではないだろうか。男体山の例は、８世紀の唐や統一新羅の金銅製舎利容器と同様、魚々子地に「蹴彫」（連続する点で線を彫る技法）で描かれており、渡来系工人の技法と思われる。柳原例も同工房における制作と推定されるので、渡来系工人がかかわっていた可能性がある。最後に、想像をふくらませることになるが、柳原の西方に位置する善光寺の一光三尊阿弥陀如来像は百済系である。塔鋺形合子がこの地域にもたらされた背景には、善光寺を支えた人々の存在があったのではないか。

珍しきもの　礫石経（れきせききょう）　下諏訪町ふじ塚遺跡出土

平安時代以降、経文は紙や木、瓦などに書かれたが、石に書いたものを「礫石経」という。

諏訪大社下社春宮の背後、諏訪湖が一望できるふじ塚遺跡から、礫石経を埋納した「礫石経塚」が発見された。礫石経塚から出土した約 40,000 個に及ぶ多量の礫石経は、小石ひとつに 1 字を書く「一字一石経」で、「無」「釈」「衆」「樹」「所」など、法華経に書かれている文字が確認できる。出土した礫石経は長さ約 5 ～ 10㎝で、鎌倉時代のものより小さいことと、書かれた文字の書体から、戦国時代末から江戸時代初頭のものと考えられる。

この時期、ふじ塚遺跡では僧侶や民衆などが書いた礫石経が埋納され、仏教儀礼がおこなわれていたのだろう。

（河西克造）

礫石経塚の調査風景

一字一石経　左は「衆」、右は「樹」

埋文本棚

①『森と日本人の 1500 年』
田中淳夫
平凡社新書 2014 年

②『森と草原の歴史』
小椋純一
古今書院 2012 年

①文献によれば、一般に「鎮守の森」は神の領域であり、太古から変わらない日本の植生が存在するとされる。しかし、これは「鎮守の森＝人の手の入らない本物の植生」という「原生林至上主義」の図式によるもので、実際には人為的に操作されている植生である。さらに、その根拠を弥生時代から近現代のさまざまな森林と人との関わりを通して述べている。

②文献は、①でも引用されているが、絵図や文献、古写真資料を見ると、京都の神社や出雲大社等の植生変化は人為的であると解釈できるという。さらに同書では観察法についてもさまざまな観点から論じる。　（藤原直人）

考古学の窓

佐久穂町小山寺窪遺跡の土坑から、木製の人形（ひとがた）4点が出土した（写真参照）。形を見ると、上部が山形状を呈しているものがあり、これらは被りものと推定される。長さに着目すると、被り物をしているものはやや長めで、そうでないものはやや短く2種類に大分できる。いずれも顔部は平坦で、目・鼻・口等は表現されていない。被り物をしているのが男性で、ないものが女性であろう。土坑からの出土であるが時期の想定できる資料が共伴していない。しかし、周辺では中世の陶磁器類が出土しているため、同様の時期の所産と考えられる。県内でも珍しい事例である。

小山寺窪遺跡出土の木製人形

こうした人形の用途は、「呪い」「病気治療」「祓」などに利用された。例えば自分の身代りとして、人形に罪や穢れ、病いを移して水に流すようなことの起源は古代中国にあるようだ。日本でも古代までさかのぼる。平安時代の『源氏物語』にも「…陰陽師めして、はらえさせ給え、舟にことごとしき人がたのせてながすを…」とあり、光源氏が祓に人形を流す場面がある。

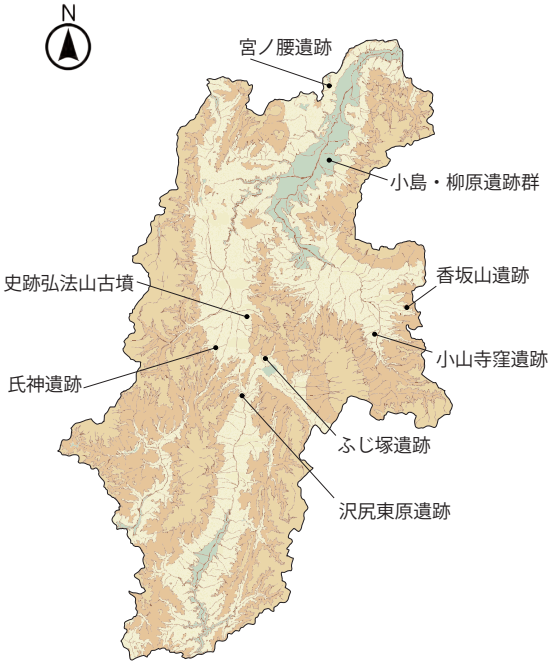
今年は、新型コロナウイルス感染症という、思ってもみなかった事態に直面し、私たちは「新しい日常」を過ごしている。過去においても、人々は疫病退散を願い、災難を避けるためにこのような「人形」などのまじないをし、祈願した。「信州の遺跡」第6号で取り上げた千曲市東條遺跡から出土した木札状の「蘇民将来符木簡」も同様な用途で使われたものである。これらは、民間伝承ともかかわり深い遺物とも言える。

高名な民俗学者の柳田国男は、失われる民間伝承等をまとめ、その重要性を世に知らしめた。振り返って、今、民間伝承に基づく江戸時代の妖怪「アマビエ」が注目されている。思ってもいない事態に遭遇したとき、「いのりの道具」として、伝統的なものが、まだまだ、生活の中に入り込んでいることをあらためて気がつかされた。

（岡村秀雄）

編集後記

長野遺跡群東町遺跡の鳥装人物の絵画土器や飯田市史跡恒川官衙遺跡の正倉など、新たなニュースが次々と飛び込んできたが、本号では、第2期整備に向けて調査を開始した史跡弘法山古墳をはじめ5つの遺跡を「最新の調査成果」として取り上げた。特に沢尻東原遺跡は、信州における平成最後の大規模発掘として注目される。「埋文トピックス」の塔鋺形合子については、本誌11号、15号やホームページも合わせてお読みいただきたい。「考古学の窓」では古代人の祈りの道具が紹介されている。一刻も早い新型コロナウイルス感染症の終息を願うばかりである。（平林彰）



本号で掲載した遺跡位置

（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL 026-293-5926　FAX 026-293-8157
http://naganomaibun.or.jp/　印刷：奥山印刷工業株式会社
この冊子は、令和2年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。